

アメツチ「天地」

内田賢徳

『古事記』は「天地初発」の四文字で始まる。

天地初発之時、於高天原成神名……

(『古事記』上巻)

このうち、「初発」がどういう日本語にあたるかということは、さまざまな試みがなされ、今も結論を見ない。一方「天地」がアメツチであることには異論がない。しかしどういう語性であるかという観点はあまり示されてこなかった。自明の古代語として扱うことに疑いはなかった。

しかし固有日本語には、the universe にあたる語がなかった。その英語 the universe は、ギリシヤ語に由来する語で、原義は回転して一つになったものという。なお、もう一つの英語 the cosmos は、秩序だった統一体という意味であるから、いわゆる宇宙は前者の方が近い。漢語の「宇宙」は、もとひさしとはりの意で、世界を意味している。漢語には「天地」という語もあった。『周易』(易経)に基づく語で、「天地有りて然る後に万物生ず」(序卦伝)とあるように、万物の始原の謂いである。

「天地」は、天と地であり、二つに分かれていて初めて「天≡地」であるはずで、『日本書紀』には、冒頭に、

古に天地未だ割れず、陰陽分かれず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。
(神代紀上)

とある。漢語としての「天地」は、中国の陰陽二分説に基づいた概念である。この語を古代日本は取り入れた。『万葉集』にも

天地の 初めの時の ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の 神集ひ
集ひいまして 神はかり はかりし時に……
(『万葉集』巻第二・一三 柿本人麻呂 日並皇子挽歌)

のように『古事記』と似た起源が歌われている。ところが、この歌の続きには、

天照らす 日女の尊 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神の尊と 天雲の 八重かき分けて 神下し いませまつりし 高照らす 日の皇子は ……

のように、天照大神が葦原中国を支配する日の皇子を降臨させるというくだりで、国の果てまでということ「天地の寄り合いの極み」と表現している。「天地」の語を取り入れて the universe という概念を得たものの、その実体は、天と地が果てのどこかで寄り合って、連続しているとする。天地は天と地であって、陰と陽が連続しないように、二つはつながっていたりはしない。天と地が寄り合うというあり方は、the universe が、それにあたる語はないものの、古代日本どのように了解されていたかを示している。古代日本において the universe とは、ただに先天的で所与的な、茫漠たる空間であって、それを漢語を借りて「天地」と名付けても、それを構成する天Ⅱアメと地Ⅱツチが連続体であることに変わりはない。それをよく示すのが「丹後国風土記逸文」の天の橋立伝承である。

郡こほりのみやけ 家の東北うしろの隅はしの方に速石はやしの里あり。この里の海に長大とほしろき前さきあり。長さ一千二百二十九丈、広さ或る所は九丈以下、或る所は十丈以上二十丈以下なり。先つ名をば天あまの橋立はしたてといひ、後の名を久志浜くしはまといふ。然云しかいふは、国生くにみたまひし大神伊射奈藝いさなぎの命、天あまに通行かよむとして椅いすを作り立てたまふ。故かれ、天の椅立いすたてと云ふ。神の御み寝坐ねます間にほじ仕たれ伏ふしぬ。仍すなはちくしびますことを怪あやしみたまひき。故かれ、久志備くしびの浜はまと云ふ。
(「丹後国風土記逸文」与謝郡)

天とイザナキの住む地とは一つにつながっていて通行可能であった。一体であったその天地の端には、はしが倒れてもつながっているところがあり、それが先の歌の「天地の寄り合いの極み」であった。

その天地をアメツチとしたのは、漢語「天」はアメという日本語が、「地」はツチという日本語が対応するために、その二つを合成したアメツチという語が新しくできたからで、しかしその意味するところは日本的な天地連続体であった。こうした語を翻訳語という。中国詩文を通して摂取した漢語を日本語として訓読することによって、本来日本語の中に存しなかった語が生まれることがある。それを翻訳語と称する。例えば、「白雪 しらゆき」は歌ことばとして伝統のある語のように見えるが、そもそもこうした構成は裝飾的な修飾と言ひ、普通は成立しないものである。裝飾的な修飾とは、「丸い玉」のように装定部分が無限定を加えないものを指し、白くない雪は存在しないから「白雪」は普通成立しない構成である。中国語でも基本的な事情は同じだが、そちらの場合、構文上四字句あるいは五言、七言などにするために形式的に「雪」に「白」をつけることがある。それを日本語で読んで受容したのが、翻訳語「しらゆき」である。『万葉集』では、歌に

……ひさかたの 天あまつた伝つたひ来る 雪ゆきじもの(白雪仕物) 行き通とひつつ いや常世とこよ
まで…… 『万葉集』卷第三・三六一 柿本人麻呂 (内は原文表記。以下同じ)

のように、漢語に倣ってユキに飾ってあてる用法と、

松陰まつかげの浅茅あさぢが上の白雪しろゆきを(白雪平)消けたずて置おかむことはかもなき

(『万葉集』卷第八・一六四 大伴坂上おほともさかののいらつめ郎女)

のように文字通りシラユキと読む用法があり、題詞中にも

天平十八年正月、白雪多零、積^レ地數寸也

〔『万葉集』巻第十七・三九三題詞〕

のように、中国語文と同様、四字句に整えるための用法が見られる。

「天地」が固有の日本語でないという事実、それは原理主義者本居宣長にとっては、都合の悪いことではなかったか。

天地之初^{あめつちのはじめ}発^はと云^いへるは、ただ先^まづ此^この世の初^{はじめ}を、おほかたに云^いへる文^{ことば}にして、此^こ処^こは必ずしも天と地との成れるを指して云^いへるには非^あらず

〔『古事記伝』〕

という規定は、同書で本居宣長はアメツチという倭語を、万葉防人歌

天地の〈阿米都之乃〉いづれの神を祈らばか愛^{うつく}し母にまた言^{ことば}問はむ

〔『万葉集』巻第二十・四三九二 アメツシは東国語形〕

によって、そのいわゆる「古言」、即ち固有日本語としている一方での、一定の留保とも見られる。ただこの例はアメツチを単に一字一音で表記しているだけであって、古来の語の証明にはならない。アメとツチとがそれぞれの概念をもっていて、それが複合されるには何らかの動機があるという考え方は、そこに芽生えなかった。

『古事記』述作にあつて、漢語表現は前提的であつて、かつその日本語表現への志向と矛盾するものではなかった。「天地」に続く「初発」の「発」は、花のひらくことをいう語で、「紫蓮夜発、紅荷暁舒」（梁・沈約「郊居賦」『芸文類聚』宅舎）のように用いる。なお詩では平声なら「開」を、仄声なら「発」を用いる。太安万侶はこの「発」を用いた。どう訓むかということをしばらく措けば、この冒頭の一節は、*the universe* が一挙に現れ出たという意味でまづはある。

安万侶にしろ人麻呂にしろ、漢語について高い学識をもっていて、それをもとに『古事記』や歌を文字に彩^{あや}なした。それがこの時代の風流である。研究者はもとより、現代の読者はそれをふまえる必要がある。